

## I 2年次後半の取組における成果と課題

各教科部の実践から明らかになったことを考察してみたところ（表1）、以下の成果と課題が挙げられる。

〈成果〉

- ①協働・対話を通して考えを広めたり深めたりすることができたこと
- ②課題に対して自らの考えをもつことができたこと

〈課題〉

- ①学びの過程で得た知識，既得の知識の活用
- ②子供が主体的に学ぶことができる授業デザイン

表1 本研究における育みたい資質・能力と各教科の振り返りとの関連

	既存の知識を活用して 課題に対して自らの考 えをもつ力	仲間の多様な考えを受け 入れ，柔軟に対応できる 力	協働・対話を通して，自 らの考えを再構成して 発信できる力
国語部	○	◎	◎
社会科部	◎	◎	○
算数部	◎	◎	○
理科部	◎	◎	○
音楽部	○	◎	◎
図画工作部	◎	◎	○
家庭科部	◎	◎	○
体育部	◎	◎	○
道徳部	◎	◎	○
外国語部	○	◎	○

具体的には、算数部においては、対話のなかで聞く力が育まれてきたこと、道徳部においては対話の充実によって考えの深まりが見られたことが挙げられており、本研究で育みたい資質・能力において、仲間の多様な考えを受け入れ、柔軟に対応する力が育まれてきたことが分かる。

また、理科部においては問いを見出す力が育まれてきたこと、体育部においては課題を明確に捉えることができたことなどが挙げられており、既存の知識を活用して課題に対して自らの考えをもつ力が育まれてきたことが分かる。

さらに、国語部においては考えを広め深めることができたこと、音楽部においては、思考の深まりから表現に活用することができたことが挙げられていることから、協働・対話を通して、自らの考えを再構成して発信できる力が育まれてきたことが分かる。

しかし一方で、発展的に考えること、見方・考え方を働かせる素地づくり、自己の学びを振り返る力、などの課題も挙げられており、一概に全ての資質・能力が育まれたとは言い切れない。さらに、教師側の振り返りとして以下のことが挙げられていた。

- ・子供が主体的に学ぶ姿の追究
- ・個に応じた多様な手立てを講じること
- ・まとまりのある学びのデザイン
- ・身に付けさせたい資質・能力の明確化

本研究において、「自他の学びをつなげる工夫」や「見方・考え方を働かせた学習活動の工夫」など様々な手立てを講じ、取り組んできた。その結果、以上の資質・能力が育まれ、課題はあるものの目指す姿に近付いていくことができた。この研究における教師側の成果は大きなものであり、次の研究においても生かしていくことができる。この成果を認めつつ以下のことも考えたい。

## Ⅱ 次年度への展望

### ～「子供主体の学びのデザイン」と「子供も教師も必要な失敗ができる挑戦意欲」～

これまでの実践の振り返りにおいて、次のような記述が多く見られた。「教師が働きかけを工夫することにより子供が自ら課題を発見したり捉えたりすることができた。」「教師が学びを振り返る場を設定することにより、子供は学んだことを自覚できた。」これらは成果である。

しかし一方で逆の見方をすると、教師が働きかけを工夫したり、場を設定したりしなければ、子供は自らの力を自ら育むことができたのであろうか、という疑問が生じる。

子供たちが活躍する社会は、正解がない、答えの出ない問題がたくさんあり、予測不能な未来である。また、子供に身に付けさせたい力は、学校を卒業したその先で発揮していくことを想定している。子供たちが、自己実現を図りながら周りの環境や人々と共生していくなかでは、教師や師匠やリーダーなどの教え導いてくれる存在は少ない、もしくはいない時がある。自分が自分のリーダーとなって自らを導いていくということが必要になるのである。

つまり、課題に挙げられているように、子供が学びの主体となって、自ら課題を発見し、自ら仲間と共に追求し、自らの考えを更新、進化、強化させてさらに発信していくような授業デザインが求められるのである。また、その授業デザインは1時間に限らず、まとまりのあるものがよい。課題に挙がっていたように、子供の変容を一時間で見取ることは難しいので、まとまりのある一定の期間での変容をめざしてデザインしていくことが大切である。子供の変容を想定した子供主体の学びのデザインを心がけていくことは教師側の必須課題となる。

また、コロナ禍において、新しい生活様式をふまえての研究、実践となった今年度は、教師自らが新しいことに挑戦する機会が増えた一年であった。この一年で挑戦して失敗した、うまくいかなかった経験はとても大切である。そして、挑戦し続ける教師の姿を身近で見ることができた子供たちは、教師の後ろ姿からたくさんのことを学び成長したはずである。これからも子供と共に教師も主体的に学ぶ姿を追求していきたい。失敗したということは試したということであり、それは利益をあげているのと同じくらい尊いことである。このような必要な失敗ができるという挑戦意欲を大切にしたい研究をしてきたい。

次年度からは4校園公開研同日開催となり、令和4年度からの公開研究発表会合同開催に向けて動き出す。新しいことの連続である。研究内容や身に付けさせたい力など小学校6年間だけを想定して研究してきたが、もっと長いスパンを想定し、幼稚園で学んだことを小学校で生かし、小学校で育んできたものを中学校で発揮できるような、連続した学びを、4校園の教師で連携しながら育てていきたい。そのためにも、これからは共生社会に生きる子供たちが、多様な考えを受け入れながらも、自ら考え自律的に行動できる姿を目指すことが大切になってくる。同時に教師同士も互いの良さや課題を受容しつつ、互いを高め合えるような関係性を構築していくことが重要になってくる。言葉にすると簡単そうだが実際はとても難しいことかもしれない。だが、附属学校園の教師たちが真に結びつき交流し合い、真に研究を紡ぎ合っていくことを期待している。

(菊地 和恵)